



気ままに、あるがままに：アメリカ研究留学奮闘記

“How're you doing?” から始まる朝の世間話と、どう見ても自分の胃よりも大きなコーラ片手にディスカッションする生活にもやっと慣れてきた。筆者は、ノースカロライナ州 (NC) ウィンストン・セーラムにある Wake Forest University (WFU) の Prof. W. Hinze の下で2年間の研究留学中である。地理的、主観的な違いがあると思うが、ここでの感じるままを書き綴ってみたい。

ウィンストン・セーラムはタバコの“キャメル”やドーナツの“クリスピー・クリーム”の発祥の地として有名だが、高級別荘地と巨大なショッピングモールがある以外、特段の娯楽施設や観光地があるわけではない。いわゆる田舎街である。むろん日本人もほとんどいない。しかし、これまで多くの日本人研究者が Prof. Hinze を慕い、ここで留学を経験されている。その Prof. Hinze はテキサス生まれの南部気質、いわゆる親切でイイ人である。猫好きで車には「猫ってそんなに食うのか？」というほどのキャットフードを積み、ズボンには溢れんばかりのクーポン券を持ち歩く変わった人だ。彼は、毎日3報ほどの論文を査読している。ACSの論文だけで年間100報来るそうだ。口癖は“So, So”。これが出るときは、“Too bad”の内容のご様子。界面活性剤などの包接メディアを用いる分析化学に精通しており、日本の情報にも詳しい。経験豊富なのに性急な面もあるので研究報告会は、まるで詰将棋のようだ。WFUには他に2名の分析化学の教員がそれぞれの研究室を運営しており、グループミーティングには誰でも参加できる。日本ではまず考えられない。私もキャピラリー電気泳動が専門の Colyer 教授に“英語の練習よ！”と誘われるがままにノコノコとミーティングに顔を出している。議論を聞くだけのはずが、意見を求められ議論する羽目に。しだいに白熱し、言葉の壁にぶつかり自己嫌悪。これも経験、日々精進と自分に言い聞かせながら帰宅する。そして熟睡し、その日の反省もリセット。またノコノコとミーティングに顔を出す。そんな繰り返し、学生気分が楽しい。

米国人は“新しい物好き”と聞いていたので、研究室にどのようなものがあるか楽しみであった。実際には、新品と骨董品が入り混じる“博物館”のようだ。NMRのような大型の機器は新しいものがお好みで、天秤のような小型の機器は動かなくなるまで使うようだ。1970年代の機器もバリバリの現役。驚きは、H先生やS先生の試薬をいまだ大事に保管していることだ。云十年前の試薬である。「使えないだろ？」と聞いたら、「思い出だ」と Prof. Hinze。

化学科の建物は他学科の建屋と比べると小さい。部屋の既得権などなく皆でシェアしている。物品や試薬も共通のストックルームに置いてあり、誰でも自由に使用することができる。ここでは日本での見苦しい既得権争いとは無縁である。皆、置かれている状況を共有し助け合っている。私の隣席の学生は、関係ない研究室の所属で、研究室に場所がないからここにいると言う。ここは



写真 WFUのシンボル Wait Chapel (左) と化学科の建物 Salem Hall (右)

物も人も複雑に入り混じっており、エントロピーが大である。いやむしろ複雑系か。いずれにしても、色々な相互作用で平衡が保たれている。このヘンテコな関係を理解するのに1か月かかったが、米国に来て“もちつもたれつ”の精神を学ぶとは思わなかった。

もう一つ驚いたことがある。文献室に *Anal. Sci.* をはじめとする日本の学協会の英文誌がズラリと置いてあり、多くのスタッフや学生が頻繁に読んでいることだ。正直、*Anal. Sci.* は米国からの投稿数が多いとは思えない。それでも結構読んでいる。思い切って「何で *Anal. Sci.* に投稿しないの？」と聞いてみた。すると「ACS分析分科会のメンバーだから、*Anal. Chem.* に投稿するのが当然じゃないの？」と聞き返された。ハッとした。そういえば誰かが日本人は見栄と建前と言っていたが、いい論文を自分の学会へというのが日本では希薄な気がする。彼らと接していると自らの学会誌を強くするという気概を持つべきという気持ちが芽生えてくる。ここへ来てからアイデンティティーが強くなったように感じる。

米国は“移民の国”＝“外国人に対して寛容”と思っていたが、社会システムはこの変な東洋人を簡単には受け入れなかった。“9・11”以来、南米からの移民問題も抱える米国では、外国人に対する管理が厳しくなった。銀行口座を開設すると10日間ホールド。何も知らずに全財産を預けてしまった私はひどい目であった。危うく餓死である。また、変な話だが米国では、自動車免許の取得には、自分で車を準備しなければならない。そこへNC州では法改正があり、自動車購入には必ずNC州の運転免許証が必要となった。つまり車がないと車を買えない。私はこの事実を購買契約した後知った。法の施行日は購買契約の3日前だった。Prof. Hinze が抗議したが法律に敵うわけがない。しかしディーラーの協力で翌日に免許を取得できた。

ここに住む人々は皆寛容で、英語の優劣に関わらず気軽に受け入れてくれる。妻と幼い子供を連れて留学するには最高の環境である。帰国後に自分がどんな風になっているのか楽しみである。今回は、成田空港のお膝元、千葉大学工学部の豊田太郎先生です。

〔福島大学共生システム理工学類 高貝慶隆〕